

最近のトウモロコシ価格の低下：その意味するもの

東洋大学名誉教授・日本農業研究所客員研究員 服部 信司

7月第2週のトウモロコシ・シカゴ期近価格は4.0ドル／ブッシェル、第3週3.7ドル、第4週3.6ドル、3週平均3.8ドルとなった。これは、2012年夏のアメリカの干ばつによって価格が高騰する以前＝2010/11年度5.2ドルを3割近く下回る水準である。

小麦の7月第2－4週平均価格は5.28ドル／ブッシェル。2010/11年度5.7ドルを約1割下回っている。大豆は、中国の旺盛な輸入需要に支えられて、なお、12ドル台の高水準を続け、2010/11年度11.3ドルを上回っているが、トウモロコシ・穀物価格の低下は明白である。

最近のトウモロコシ価格の低下は、アメリカの干ばつによる2012年以降の価格上昇が元に戻ったというだけでなく、それを超える価格の低下が発生していることを示している。

このトウモロコシ価格の低下は、次のような事情のもとで生まれたと考えられる。

1) アメリカの2012年の干ばつ後、13/14・14/15年度と2年連続して、アメリカと世界のトウモロコシ生産が記録的な高水準を続けている。アメリカのこの2年平均生産量3億5290万トン、10/11・11/12年度平均3億1500万トンを12%上回り、同じく世界生産量9億8270万トンは、10/11・11/12年度平均8億5750万トンを15%上回っている。(データはアメリカ農務省WASDEによる)。

2) そのなかで、アメリカにおけるエタノールへのトウモロコシ使用量が11/12年度1億2700万トンから12/13年度1億1800万トンへと7%減少し、さらに、2014年の再生燃料使用義務量(RFS：アメリカ社会が使用すべきエタノールを中心とする再生燃料の量)が130億ガロンとなり、前年144億ガロンから10%引き下げられた。{この引き下げの背景には、トウモロコシ価格の上昇で打撃を受けたアメリカ畜産州のRFS停止要請(2012年)、畜産業界の廃止要請(2013年)があった}。

13/14・14/15年度のエタノール向けトウモロコシ使用量は1億2800万トン台を横這うとアメリカ農務省によって予測されている。

3) 13/14・14/15年度平均のブラジルのトウモロコシ輸出量2030万トンは10/11・11/12年度平均1120万トンを81%上回り、同時期のウクライナの輸出

量1800万トンは同じく84%上回っている。そのもとで、アメリカのトウモロコシ輸出量の世界シェアは、10/11・11/12年度平均の41%から14/15年度には37%に低下すると予測されている。ブラジル・ウクライナによる輸出拡大のもとで、アメリカの輸出シェアが低下してきた。

4) 世界のトウモロコシ生産・消費の中心＝アメリカにおける生産の大幅な拡大、他方、過去7年間ににおけるトウモロコシ需要の増大を推し進めたエタノール使用の減少と横ばい化、輸出の伸びなやみというなかで、アメリカの14/15年度のトウモロコシ在庫は4580万トンに達すると予測されるに至っている。その場合の在庫率{在庫量/(国内使用量+輸出量)}は13.5%になる。これは、10/11年度の在庫2860万トン、在庫率8.6%からの大幅な上昇となっているだけでなく、13/14年度の在庫率9.2%からの著しい上昇となっている。トウモロコシ価格の低下は、この結果として生まれたのである。

2007年以降、アメリカにおけるトウモロコシのエタノール生産への大量使用が進んだ。10/11・11/12年度平均のエタノール向け使用量1億2730万トンは生産量の40%に及び、アメリカのトウモロコシ需要構成は「食料中心」から「食料・エネルギー」に変化した。1997年以降2ドル前後に推移していたトウモロコシ価格が2007年以降上昇を続け10/11年度に5.2ドルに達したのは、トウモロコシ需給が「食料需給」から「食料・エネルギー需給」に変化し、食料需給が圧迫され、ひっ迫したからである。

最近のトウモロコシ価格の低下が示すものは、トウモロコシ生産の拡大と他方におけるエタノール向け使用の減少・横ばい化により、2007－13年の7年間に及ぶ需給ひっ迫の構造がある程度緩和する構造に変わりつつあることである。

日本の畜産生産者は、長い間、トウモロコシ・飼料価格の高騰に悩まされてきた。このトウモロコシ需給構造の変化は、飼料価格高騰状態からの変化を予告するものになるかもしれない。

